産経新聞　2014年7月10日　朝刊

印象派と和の伝統が育む清新な美

ベルリンで開催 平松礼二展

寄稿　東京工芸大教授 石川健次

水面を渡る柔らかな風が頬をくすぐる。会場に並ぶ作品、とりわけ六曲一双屏風の「モネの池　微風」を前に、その清澄な色彩、流麗な描線に長旅の疲れが癒やされてゆくのを感じながら、画家の不安は杞憂に終わると私は確信した。

ドイツの首都ベルリンにある国立アジア美術館で、現代日本画を代表する一人である平松礼二の個展が8月31日まで開催中だ。活躍中の日本画家が東洋美術の殿堂として知られる同館で個展を開くのは、1989年の東山魁夷に次いで2人目という快挙である。

41年生まれの平松は昨夏、パリ近郊のジベルニー印象派美術館で大作を中心に個展を開いた。2009年に同館が開館して以来最高の8万人近い来場者を記録した他、全出品作に加えて個展終了後に描かれた2点を含む大小27点の日本画すべてが同館のコレクションとなるなど、フランス内外で大きな話題を集めた。同展を見た国立アジア美術館のクラース・ルイテンビーク館長が「ぜひドイツでも」と熱望し、今回の個展は実現した。大作を中心に印象派美術館のコレクションから厳選された14点が並ぶ。

52歳の時にパリのオランジュリー美術館でモネの大壁画「睡蓮」に出会って印象派を再発見して以来、平松は印象派ゆかりの地を毎年のように訪ね、今も人々を魅了する印象派に美の根源を問いつつ普遍の芸術を、新たな創造を試みる。昨夏の個展で印象派の故郷フランスが、そこに暮らす人々が驚嘆し、酔いしれたのはまさに、日本の伝統を礎に東西を往還するなかで育まれる清新な美であっただろう。

個展に出品された平松礼二の「水と樹と睡蓮の交響楽」（左隻）

そして、ドイツである。世界のアートシーンの中心とも言える両国で相次ぐ個展に画家は意気軒昂と思いきや、開幕前の表情には不安もにじんでいた。「圧縮されるようなかたちで短期間に展開」（神林恒道「ドイツにおける印象主義の展開」／『世界美術大全集』）したドイツの印象主義を念頭に、「フランスほど関心も浸透もしていない印象派との対話の上に創作する私の作品が、それでなくてもなじみのない日本画が、どう受け止められるのか」。ドイツへたつ直前、画家は私にそう漏らした。

早々に会場を訪れた私は、ルイテンビーク館長に平松芸術の魅力を聞いた。

「平松が関心を抱く印象派は、浮世絵など日本の芸術に憧れた。時空を超えたダイナミックな往還は見逃せない。隅々にまで繊細な配慮が行き届き、強く、鮮烈な色彩はドイツの人々をきっと魅了する」と。担当学芸員のアレクサンダー・ホフマンさんも、流暢な日本語で言葉を継いだ。「平松の作品は季節感にあふれ、和歌を詠んでいるみたいだ。現代絵画の一つの成果として私もじっくり味わいたい」

2人の言葉は、まるで平松の不安を打ち消しているように私には聞こえる。平松の不安は雲散するだろう。アニメやマンガだけではない。期待したい、平松芸術の魅力に、大きく、広く拡散してゆく力に―。